

「日本風景街道の意義を考える」

暖かい日が続き、草木も人も活発に動きはじめてきました。日本には明瞭な季節の変化があり、それが繊細な地形を舞台とした地域の歴史・文化に彩を沿え、私たちに四季折々の美しさを見せてくれます。関東にはさらに大都市という舞台もあって、双方で繰り広げられる多彩なアクティビティが、関東というエリアの魅力を高め、交流を深める原動力になっているのだと思います。

日本風景街道・関東にとっても、暖かい春は活動が本格化する時期。お客様を迎える準備のため、清掃、花植え、看板や景観を阻害しているものの撤去など、美しい風景づくりに勤しんでいらっしゃることでしょ。

その際、活動の本質的な部分を意識することをお忘れなく。自分達がやっていることは景観を向上させることそのものではなく、その活動を通して風景に映りこむ街の活気、人々の元気・愛情・誇り、ふるさとの山や川の生気を向上させることなのです。

米国のシーニックバイウェイでは、ルートに連なる様々なコミュニティが連携し、地域の人々も楽しみながら来訪者をもてなしています。端的に言うと、ボランティアが地域の誇りである固有のストーリーを熱く語るという地道な活動の積み重ねが交流人口の増加、ひいては地域の経済発展につながっているのです。

日本のシーニックバイウェイのさきがけで私が立ち上げに加わったシーニックバイウェイ北海道も同様で、愛着と誇りのもてる美しい地域にしたい、訪れる方に喜んでほしいといった地域の想いを実現するため、景観・地域・観光を中心要素に据えて人々が連携しています。旅行会社やレンタカー会社とタイアップするなどして、既に自立に向けたコミュニティビジネスの展開に結びついた例もあります。

日本風景街道は「道を仲立ちにした地域づくり」にはかなりません。景観向上はその序の口であること、地域を元気にするにはモノ・カネより「人の連携」こそが大事なのだということもわかってきました。だからこそ、皆さんには力を合わせ知恵を結集し、次のステージに向かって邁進していただきたいと思っています。もちろん行政サイドには、それを柔軟に受け止める覚悟が必要となります。その意味では、風景街道は進化したPI、草の根型の行政改革なのでしょう。風景街道は新しい地域づくりであり、新しい道のあり方であり、新しい道路行政のあり方への挑戦という側面もあります。

かんとう 風景 街道ニュース

2008・Spring No.4

<http://www.ktr.mlit.go.jp/kanto-fukei/>



日本風景街道戦略会議 委員

筑波大学大学院

システム情報工学研究科 教授

石田 東生



北条大池と春の筑波山